

## ウェスレーと英国教会

坂本 誠

### 序論

ウェスレーは 18 世紀の英国を生き抜いた人物であり、英国教会との深い  
かかわりの中で神学を形成し、英国教会を変革しながら国家全体の変革をも  
目指した人物である。ウェスレーは英国教会を愛し、英国教会人としての誇  
りを持っていた。1787年にウェスレーは「メソジストが英国教会を去るとし  
たら、神もまた彼らから離れるであろう。毎年多くの司祭が私たちが真実と  
成長を証明していると確信を持ってきている。今分離することは一般の思い  
や良心とは反することである」<sup>1</sup>と語る。さらに 1788年に「自分は英国教会  
人であり、50年前に言ったように、今も私が不当に追い出されない限りは英  
国教会内で生き死ぬ」<sup>2</sup>と語っている。翌年にも以下のように語る。

初代教会の次に私は自分の教会である英国教会を世の中でも最も霊  
的な教会であると考えている。それ故に私はすべての教理に同意す  
るだけでなく、すべての典礼・規定を可能な限りの正確さをもって、  
生命の危機の時でも守る。・・・私は英国教会の一員として生き、死

---

<sup>1</sup> 手紙 to his Brother Charles, 1786.4.6 John Musey Turner, *John Wesley - The Evangelical Revival and the Rise of Methodism in England*, (Epworth Press, 2002), p.97 参照。

<sup>2</sup> 手紙 to Henry Moore, 1788.5.11

ぬことを宣言し、私の見解を評価する者は何者もそこから分離してはならない<sup>3</sup>。

ウェスレーがいかに英国教会人であったかはこれらウェスレーの後期の発言から容易に推し量ることができる。

ウェスレーは祈祷書に関しても絶大な信頼を寄せている。「私は世界中で英国教会の祈祷書ほど、今昔の言語において確かで聖書的で理性的な敬虔さをもったものはないと信じる。200年前の言語であるが、純粋であるだけでなく、高度に華麗であり強靱である」<sup>4</sup>と書いている。

しかし、ウェスレーは英国教会になかった慣例を実践していることも事実である。聖餐やリタジーへの尊敬を持つハイチャーチマンとして出発したウェスレーが野外説教や、自由祈祷、そして最大の貢献である讃美歌を駆使しながら英国教会の分離派になっていく過程は一言では述べ尽くせないことは言うまでもない。ウェスレーもそのことを認めて1760年の年会で以下のように語る。

問：我々は分離派なのだろうか。

答：我々は不規則(irregular)ではある。

神の支配するすべての場所で罪人を悔い改めに招くことによって自由祈祷を頻繁に使用することによって<sup>5</sup>。

野外説教、自由祈祷はこれまでの英国教会の伝統から考えれば確かに不規則ではある。また、ウェスレーの実践的な牧会は不規則を超越したようにも感じる。英国教会の人々から見ればウェスレーの牧会が分離主義者・熱狂主

---

<sup>3</sup> Thomas Jackson edited, *The Works of John Wesley* XIII, 272f. (以下 Works と表示)。

<sup>4</sup> *The Sunday Service of the Methodists in North America, With other Occasional services*, Davies, op.cit., p.188.

<sup>5</sup> Minutes of Conference I, 1766, p.58. Tyerman, *Life and Times of John Wesley*, vol II, p.576. John Musey Turner, *John Wesley –The Evangelical Revival and the Rise of Methodism in England-*, (Epworth Press 2002), pp.99-100 参照。

義者のように見えたことも否めない。事実、英国教会の側からみたウエスレーの評価は微妙である。英国教会の歴史神学者であるノーマン・サイクスはウエスレーを評して以下のように述べる。

英国における 18 世紀の宗教の最も偉大な人物であるジョン・ウエスレーをエキュメニカル運動のどこに置か否は非常に困難である。ウエスレーは多くの点で英国及び新世界の宗教生活に触れ、世界が自分の教区であるという主張を誇り高く為したのであるが、彼の宣教努力の主な原則は新しいソサエティの基礎になり、キリストの普遍的な教会に分離された別の会員をもたらしてしまった。……新約聖書の主教と長老を同一視するという彼の確信に関してウエスレーが自国のかなりの数の意見と同調してしまい、ソサエティと既存の教会の障害を取り除く代わりに牧者に按手を施したことは、彼らの会員を増加させ最高潮に達することをもたらしてしまった。このように、時代における最も偉大な宗教的指導者は普遍的教会の分離を癒すよりもそれを加速化してしまったのである<sup>6</sup>。

この発言は、英国教会側からのウエスレー観を示すものとして興味深いが、この分離は必然であったのだろうか。本論文では、ウエスレーが英国教会とどのようなかかわりを持ったかを、権威及び職制の観点から考察していく。

## I 英国教会とのかかわりにおける研究史

ウエスレーと英国教会を考察するにあたり、英国教会との関連で忘れてはならない著書がフランク・ベーカークの著書である<sup>7</sup>。ベーカークはウエスレーの生涯を通して英国教会との関わりを事実則して様々な角度から論述する。ウエスレーは英国教会から離れたことにおいて新しい教会論を提示したので

<sup>6</sup> Norman Sykes, in R. Rouse and S. Neil (eds), *A History of the Ecumenical Movement 1517-1948*, (SPCK, 1967), pp.164-5.

<sup>7</sup> Frank Baker, *John Wesley and the Church of England*, (Abingdon Press 1970). フランク・ベーカークはメソジストの牧師としての立場からウエスレーと英国教会運

はなく、英国教会の衰退を癒すものをもたらそうと試みたとする<sup>8</sup>。ウェスレーは英国教会を霊的に改革する為に、伝統的には存在しなかった様々な実践的方法を生み出した。ウェスレーは聖書、伝統、理性を重視したが、同時に宗教的な実践主義者であった<sup>9</sup>。ウェスレーと礼典との関係は、それが儀式としてではなく実践的、霊的な価値を包含したものであるという点にある。ベーカーは1729年をウェスレーが英国教会の外的権威から離反した転換の年であると理解する。ウェスレーは当時エプワースでの牧会に苦慮し、外的な規則を守ることも、ジェレミー・テイラーの影響を受け、霊的な教訓をより重んじるようになった<sup>10</sup>。このように早い時期よりウェスレーの分離の可能性を指摘している点は興味深い。

ロバート・クッシュマンはウェスレーの神学を経験的神学(Experimental Divinity)として紹介する<sup>11</sup>。クッシュマンはウェスレーが英国教会に土台を置きながらもメソジストソサエティを形成した背後には、ウェスレーが根本的に目指していたものが当時の英国教会には希薄だったからと語る<sup>12</sup>。ウェスレーはそれを英国内にあったExperimental Divinity(経験的神学)として再提示しようとした。クッシュマンはウェスレーの「経験的神学」の内容を明らかにし、この用語が「救いの聖書的方法」と同義語であることを示す。「経験的神学」とは論理的思考だけでなく実生活における経験の全体を示すものである。これはクランマー等が提唱した「生きた信仰」(living faith)と表現できる<sup>13</sup>。ウェスレーは経験的神学の実現の為にメソジストソサエテ

---

動を見つめる。

<sup>8</sup> Ibid. ベーカーはウェスレーの教理が決して大陸の宗教改革者のそれではなく、英国教会で生まれたものであるとし、クランマーの祈禱書への忠誠、フッカーの理性の尊重等をあげている。

<sup>9</sup> Ibid., p.3.

<sup>10</sup> Ibid., p.23.

<sup>11</sup> Robert E. Cushman, *John Wesley's Experimental Divinity; -Studies in Methodist Doctrinal Standards*, (Kingswood Books, 1989).

<sup>12</sup> Ibid., p.21.

<sup>13</sup> Ibid., p.21. ウェスレーは英国教会の1659年の信条を継承していた。ウェスレーは1738年2月にアメリカより帰国した後、エドワード6世の時代にクランマーを中心に作られた英国教会の説教集を編集出版するべく努力している。この説教集にはパウロの義認の強調とヤコブ書の業の強調が矛盾しておらず、合致して

イを形成していく上で牧会と礼典の役割を重要視する。ウエスレー神学にとって「生きた信仰」と教会論、牧会論、礼典論は相互補完的に機能し、根本的なものであった<sup>14</sup>。クッシュマンの貢献は、ウエスレーを英国教会の伝統的な神学的伝統と実践的に結びつけたことにある。

日本でも岸田紀が『ジョン・ウエズリ研究』<sup>15</sup>を1977年に出版し、英国教会の中の高教会主義的アルミニアニズムに立つウエスレー像を打ち出した。岸田は英国教会史の一面からウエスレーの運動を分析する。ウエスレーの倫理体系がカルヴァン主義のそれと異なり、慈善の体系に位置していることをマックス・ウェーバーとの比較から考察する。さらに、ウィリアム・ローの召命観とジェレミー・テイラーの返還の思想を引き合いにだしながら、ウエスレーのアングリカン高教会主義者に立つアルメニアン神学に則った慈善理解を強調する<sup>16</sup>。ローとテイラーは英国教会の司祭であり、高教会派に属し、ピューリタンの論敵であるウィリアム・ロードの思想系列であり、神学系統としてはアルミニアニズムに位置する。岸田はウエスレーの「よきわざ」理解は、アルメニアンの主張する「普遍的召命」の「わざ」である「断食、祈り、慈善」という世俗外的な三種の「よきわざ」を意味し、それは高教会アルメニアンの「よきわざ」理解に立ち、カルヴァンの「職業」倫理体系の「よきわざ」の「職業」労働とは異質のものであると結論する<sup>17</sup>。岸田の指摘は、ウエスレーが当時のカルヴァン主義的神学のみでなく、禁欲倫理から来る富の蓄積を否定することからも的確であると考えられる。ウエスレーがテイラーから学んだ不正な富の返還の思想は慈善理解と合致する<sup>18</sup>。初期においてウエスレーに影響を与えた人物としてウィリアム・ロー、ジェレミー・テイラー、

---

いるという言及もあり、ウエスレーの目指していたものと一致する。Thomas C. Oden, *John Wesley's Scriptural Christianity - A Plain Exposition of His Teaching on Christian Doctrine*, (Zondervan Publishing House, 1994), p.205.

<sup>14</sup> この点に関してはウエスレー・メソジスト研究において考察した。坂本 誠、「ウエスレーとプラクティカルディヴィニティ」、『ウエスレー・メソジスト研究』1 (2000) 参照。

<sup>15</sup> 岸田 紀、『ジョン・ウエズリ研究』、ミネルヴァ書房、昭和52年。(1977)。

<sup>16</sup> 同書、1-11頁。(前書きの項参照)

<sup>17</sup> 同書、10-11頁。

<sup>18</sup> 同書、152-155頁、172頁、323-324頁、326頁。

トマス・ア・ケンピスの3人が挙げられるが、ジェレミー・テイラーの影響は最も大きいと筆者は考える。岸田の研究はその意味で重要な視点を含んでいる。英国史の視点からみたウェスレーの位置づけも得るところが多い。

ピューリタンとの関係の研究は、モンクのものあげられる<sup>19</sup>。彼はウェスレーが収集したクリスチャンライブラリーの中にバクスターをはじめ多くのピューリタンの著作が含まれていることに注目し、ウェスレーの実践的神学、規則正しさなどはピューリタンの影響からきたものであるとした。

野呂芳男は1975年に『ウェスレーの生涯と神学』を出版した<sup>20</sup>。野呂もウェスレーへのピューリタン神学の影響を認める。野呂はウェスレーの神学を楢円の神学と呼び、野呂はウェスレーの中にある第1の回心である高教会主義的側面と第2の回心である宗教改革的側面を互いに影響を及ぼし合う楢円として捉え、両焦点の中心要素が互いに浸透し合い絡み合っているとす<sup>21</sup>。野呂は高教会主義的立場、ピューリタンの立場、宗教改革的立場のいずれかにたてこもって、ウェスレー神学の一切をそこからだけ理解する態度をとる必要はないとする<sup>22</sup>。野呂は、義認ではなく聖化からウェスレーの神学を考察することを強調する。この立場は、聖霊体験の神学を中心概念とし、聖化を中心に高教会主義的立場、宗教改革的福音主義の立場の両者を収斂するものである<sup>23</sup>。

以上、短く研究史を見てきたが、ウェスレーにおいては様々な神学的伝統の影響が認められる。同時に、ウェスレーにおいては、神学に則って実践が展開されているということも重要である。高教会主義者として歩んできたウェスレーが、何故野外説教や組会等の実践的手段を用いた大胆な改革をすることができたのかということである。この実践的メソジズムには、高教会主義的な立場と共に、ピューリタニズム、モラヴィア派などの様々な思想の役

---

<sup>19</sup> Robert Monk, *Wesley His Puritan Heritage second edition* (The Scarecrow Press, 1999)

<sup>20</sup> 野呂芳男、『ジョン・ウェスレーの生涯と神学』、日本基督教団出版局、1975年。

<sup>21</sup> 野呂、同書、215-216頁。

<sup>22</sup> 同書、141頁。

<sup>23</sup> 同書、216頁。

割が見られる<sup>24</sup>。しかし、ウエスレーの基礎となったものは、ウエスレーが生まれ育ってきた英国教会の中に育まれてきた実践性及びウエスレー独自の福音理解ではないかと考える。ホートン・デーヴィスはその著書の中でメソジズムの礼拝は英国教会のリタージカルな側面と自由な祈祷の両面の組み合わせであったとしている<sup>25</sup>。ウエスレー神学を考察する場合に、ウエスレー神学の持つ包括性をどの視点で考察していくかが重要であるが、英国教会は多様性を包含する教会であり、この伝統と切り離されたウエスレー理解はあり得ない。

## II. 三支柱と四支柱の関連性

### II-1. 聖書・初代教会・英国教会

これまで数名のウエスレー研究者は、権威いかに理解するかに関して、ウエスレーの貢献が聖書、伝統、理性に加えてもう一つの要素である経験を加えたことにあったとし、これら4つをウエスレーの四支柱として捉えてきた<sup>26</sup>。テッド・キャンベルは、四支柱の概念がメソジスト教会の中でいかに形成されてきたかを議論する。この中でキャンベルは四支柱をウエスレー自身に帰するのに疑問が残るとし、メソジスト神学が4つの要素をいかに神学的な「源」であり「基準」であるとしたかを歴史的に述べている<sup>27</sup>。

ウエスレーは英国教会の三支柱をどのように捉えていたのであろうか。ウ

<sup>24</sup> 例えば、組会はモラヴィア派からもたらされたものであるし、規則や日記の活用はウエスレーが英国教会の伝統、ジェレミー・テイラー、ピューリタニズムから得たものである。

<sup>25</sup> Horton Davies, *Worship and Theology in England – From Watts and Wesley to Martineau, 1690-1900-* (Eerdmans 1962), p.184.

<sup>26</sup> 代表的な神学者は Donald, A.D. Thorsen, *The Wesleyan Quadrilateral - Scripture, Tradition, Reason, Experience as a Model of Evangelical Theology* (Zondervan Publishing House 1990). 有効な議論は Colin W. Williams, *John Wesley's Theology Today – A Study of Wesleyan Tradition in the Light of Current Theological Dialogue*, (Abingdon Press 1960), pp.23-38.

<sup>27</sup> Ted A Campbell, The “Wesleyan Quadrilateral”: The Story of a Modern Methodist Myth, in Thomas A. Langford edited, *Doctrine and Theology in The United Methodist Church*, (Kingswood Books 1991).

エスレーは聖書、伝統、理性の形式を自分が継承していることを以下のように言い表す。

子どもの時から、私は聖書と神の託宣を愛し、尊敬するように教えられてきた。この2つの次に来るものとしては、最初の3世紀の著作家である初代教父たちである。初代教会の次に、我々自身の世界の中で最も聖書的な国民教会である英国教会が来る。それ故に、私は、すべての教理に同意するだけでなく、リタージーの中にある礼拝形式を自分の人生の危機の時にもできるだけ正確に守っている。この判断と精神で、私は、聖書、初代教会、英国教会に強く依拠しながらアメリカに行った。私はこの3つのものからほんの少しも異なる<sup>28</sup>。

ここには、聖書の中にあらわされている神の意志への従順と、初代教会の伝統に従っていくウェスレー像がある。聖書は主要で規範的なアングリカン及びキリスト者の信仰の基礎であり救いに必要なものが存在する。ウェスレーは聖書を恵みの手段の1つとして見ていた。

ウェスレーは、初代教会を理想の教会像としていた。当時の英国教会観は現代のグローバルなアングリカンとは違い、主に、4、5世紀の初代教会の正当な後継者として位置づけられていた。4、5世紀は東方教会の教父たちが活躍した時期でもあった。しかし、これは彼がただ単に伝統を消極的にのみ守ろうとしているのではない。彼が初代教会に立ち返る時は、真の教会像を求めて改革をしようとしていた時であった。ウェスレーが保守的な意味で伝統主義者でないことがここから理解できる<sup>29</sup>。

ウェスレーは英国教会の教理だけでなく、礼拝形式を重んじていた。1739年ウェスレーは英国教会からの批判に対して「我々が説教している教理は英

---

<sup>28</sup> Works VIII, 272.

<sup>29</sup> 同じような考え方は Ted A. Campbell, Christian Tradition, -John Wesley and Evangelism-, (Wesleyan Theological Journal Vol.LXXIV. No.1 Winter, 1992), pp.65-66 にも見られる。



国教会の教理である。教会の根本的な教理が祈祷や、信条や説教の中で明確に述べられている」とする<sup>30</sup>。1773年にも彼は「メソジストは信条や礼拝式法、教会法典を他の3つの王国のどの人々よりも守っている」としている<sup>31</sup>。このことから彼が生涯を通じて英国教会に忠実に生きたことをアピールしようとしていることがわかる。

それではウェスレーには経験をどのように考えていたのであろうか。ウェスレーは教理的な取り扱いである「原罪」の説教を「聖書、理性と経験による原罪の教理」と題している。ウェスレーはなぜここで「理性と経験」とあえて並行して語っているのであろうか。当時の英国教会では理性と経験はいかに捉えられていたものであろうか。ウェスレーはそれに対してどのように考えていたのであろうか。まず英国教会の理性理解を考えていきたい。

## II-2 英国教会・ウェスレーの理性理解

### 1) リチャード・フッカー：教会政治理論

英国教会において理性を重要視している神学者はリチャード・フッカーである。フッカーは、権威の源泉を「聖書」のみならず、「聖書」「伝統」「理性」の三要素に拡散させた。フッカーは、『教会政治理論』の中で、「理性」が聖書のより正確な解釈のための全体であり、また聖書が明白に指示していない課題についての判断を決断する鍵であるとする<sup>32</sup>。フッカーは、「聖書」と解釈学的意味における「理性」に第一義的価値を与え、「伝統」に第二義的価値を与えた。これに対してピューリタンは、理性を「不幸な彗星」とし、否定的にとらえ、フッカーを批判する<sup>33</sup>。

### 2) ウェスレーの理性理解

<sup>30</sup> 日誌 1739.9.13.

<sup>31</sup> 手紙 To James Creighton, 1773.5.24.

<sup>32</sup> 西原廉太、『リチャード・フッカー ―その神学と現代的意味―』、聖公会出版、1995、71頁。西原は英国教会の Via Media が学問的、教理的中庸であるだけでなく、改革され続ける旅の途中にある教会を意味すると強調する。

<sup>33</sup> 同書、80頁。

ウェスレーの生きていた時代は理神論の時代であった。啓蒙思想の影響を受け、これまでのキリスト教理解への問い直しがはじまっていた時代であり知的発展は著しいものであった。当時の思想界は、生得概念としての固有な知識を尊重し、人間は経験の集積であるとするロックの立場があった。

ウェスレーには2つの理性理解があった。アングリカンから受け継がれた、教会の教理への理性的承認と聖霊による知覚、認識である。ウェスレーは信仰について以下のように語っている。

信仰は理性的な基礎の上の命題への承認である。理性的な基礎なしではどのような信念もなく、それゆえに信仰もない。しかし私たちは救いに入れられることを聖書に照らして教えられる<sup>34</sup>。

ここには最終的には聖書に最終的権威を置きつつ理性の役割を認めている姿を見ることができる。ウェスレーに影響を与えた英国教会の伝統はエラスムスの自由意志論に基礎を置き、理性・主体性を重んじながら宗教主義的立場をとるものであった<sup>35</sup>。ウェスレーには先行する恵みの教理が存在する。この教理において、ウェスレーは、自然と恵みを対峙させることなく、理性を含むすべての知識を神の恵みに基づく「恵み深い」知識と捉えた<sup>36</sup>。

ウェスレーは信仰における理性の役割を認めた上で、聖霊の役割を強調した。ウェスレーは以下のように語る。

聖書が明言するところをわたしたちに理解させるものは、聖霊に助けられた理性ではないか。神が人の子を取り扱われる方法、すなわち、神の時の配分、旧約と新約、律法と福音の性質について私たちが幾分でも理解することを可能にするのは理性によるのである。神の御霊が私たちの理解の目を開き、また照らして下さり、私たちは

---

<sup>34</sup> 手紙 To Suzanna Wesley, 1725.7.29

<sup>35</sup> 清水光雄、「ウェスレーと他宗教」、『ウェスレー・メソジスト研究』3 (2002)、24頁。

<sup>36</sup> 同論文。

理性によって以下のことを知るようになる<sup>37</sup>。・・・

ここには靈的感覚を土台としたもう一つの認識が述べられている。ウェスレーはロックの生得知識を否定している。ウェスレーはロックとは違い経験が全てであると考えずに、経験や理性の限界に注意すべきことを痛感していた。

ウェスレーは以上の2つの認識を統合したと言っても過言ではない。ウェスレーは理性の宗教に対する役割について注目していた。理性は聖霊の導きにより、我々が信仰し実践することを導いてくれる。なぜならば「宗教の全体は理性的な奉仕だからである」<sup>38</sup>。しかし、理性は信仰を把握する上で必要なものであるが、最終的な権威ではない。ウェスレーにおいては理性以外にも宗教知識への深い感覚が必要であった。ここにウェスレーの神の主権と人間のそれに応答する働きという包括性が存在する。

### 3) ウェスレー・メソジズムへの批判

この理性理解が明確に発揮されるのは、ウェスレーのリヴァイヴァルが起こって次第に英国教会側からの批判が起こってきた時である。メソジストソサエティーの行っていた野外説教が寛容令に違反するという理由でも反対を受けた。1742年にはジョゼフ・タッカーというブリストルの教区牧師やジョセフ・バトラーはウェスレーが信仰による義認と「罪なき完全」という二重の福音を語っているという批判を出版する。さらにジョージ・ラヴィングトン(George Lavington)のウェスレーの攻撃が一番激しいものであり、メソジストの靈的な経験を対象にして攻撃した。英国教会の人々にとってウェスレーの宗教・神学は熱狂主義的なものと映ったのである。清水はこの批判を「宗教を理解する際、宗教理解を客観的な理性的思惟や道徳の内にもみ置くのか、それとも内的自己意識に置くのか、という問題がウェスレーの英国教会の中

<sup>37</sup> 説教 70 「The Case of Reason Impartially Considered」 I・6. 訳はデマレー、『ウェスレーの黙想と祈り』、福音文書刊行会、1985年、50頁参照。

<sup>38</sup> 説教 70 「The Case of Reason Impartially Considered」 I・6. 訳はデマレー、『ウェスレーの黙想と祈り』、福音文書刊行会、1985年、50頁参照。

にあった」とする<sup>39</sup>。英国教会内部には前者の信仰理解しか存在しなかった。ウェスレーの中には理性の項で見えてきたように、信仰に対する理性を通しての承認という国教会特有の姿勢があった。これに加えてウェスレーはもう1つの認識形態であるエレグコスなるものを語る<sup>40</sup>。それは内在的な、主観的宗教知識であり、体験が重視されるものであった。これは聖霊の確証の教理がウェスレーの中に存在することと関連している。近年出版されたヘンリー・ラックの著書はウェスレーの合理的な熱心主義者だと定義する<sup>41</sup>。ウェスレーにおいては理性の働きを強調せざるを得ない状況が存在していたのである。

### II-3. ウェスレーの経験理解

ウェスレーにとって経験は、物事の正しさの直観的な感情というものではなく、いくつかの試験を通しての発見を意味している。18世紀は経験主義が流行しはじめており、どこに自分達の知識の根拠を置けばいいのかが問われた時期であった。ウェスレーは理性のみによる啓示ぬきの認識を拒否する。ウェスレーの経験には神の参加が必要なのである。神が人に認識力を与える。その恵みに応答していくことが認識につながる。ウェスレーの目指す宗教はロバート・クッシュマンが言うように経験の宗教(experimental religion)と呼ばれることにも関連するのであるが、彼は自分の経験に基づいて、物事を検証していくという要素があった。彼はアルダスゲートの経験を

私は自分の心が不思議に暖まるのを感じた。私はキリストを、キリストのみを救われる為に信頼していると感じた。私の罪をキリストが取り去り、そして罪と死の法律から私を救ってくれたという確信

---

<sup>39</sup> BE Works. p.599.

<sup>40</sup> 清水光雄、『ジョン・ウェスレーの宗教思想』、日本基督教団出版局、1992年、115-116頁。

<sup>41</sup> 同書 ウェスレーにはエレグコスというギリシャ語に信仰の本質的定義を加えようとする。これは目に見えない物の「確証」「確信」を指し、ウェスレーは信仰を二重に定義する。聖霊によって開示された感官という信仰理解と、この霊的感官を通して霊的世界をいるという人間の知覚行為としての信仰理解である。

が与えられた<sup>42</sup>

と語る。「感じた」という言葉は、自分の経験を感覚的に捉えていることを示しており、ウエスレーにとっては経験の第1段階となるのはこの感覚的な経験から与えられる知識であった。しかしその後で、「確信が与えられた」と語っていることに注目したい。それは個人の感覚的な体験に基づきながら、理解や洞察や情報に依存する知識であり霊的な知覚を意味するものである。ウエスレーにおいては、外的な経験に基づく体験である前者と、内的な霊的経験、救いの確信の両者があってそれが統合されているのである。

ランヨンはウエスレーの体験を、オーソパシーに媒介されたオーソドキシシーとオーソプラキシシーの統合としてみた<sup>43</sup>。正しい教理は正しい経験に媒介され、正しい実践となっていく。ウエスレーの目指していた心と生活のホーリネス(holiness of heart and life)と言われる。リタージュカルや信条によって教会形成をしてきた英国教会内にとって、それに基礎をおきながら心と生活の両面の宗教を強調したウエスレーの貢献を見ることができると思う<sup>44</sup>。

ウエスレーは、フッカー同様、権威の拡散を行った。特に経験の強調はウエスレーを英国教会の伝統にはないフリーチャーチの伝統へと移行させたのではないだろうか。その為に、彼は英国教会から批判を受けた。ウエスレーは理性に積極的な価値を与え、さらに理性をも神の恵み深い知識と捉える。同時に理性に限界をもうけて、神の主権による確証の教理を示した。理性に独自の役割を与え、権威の拡散をはかったフッカーに対して、ウエスレーはその理性に限界を儲け、聖霊の働き、確証の教理を導入したのである。ウエスレーの認識理解に聖霊の働きが加わったことによりウエスレー神学は英国教会の伝統にない形式をもたらしていくことになったのである。

<sup>42</sup> Henry Rack, *Reasonable Enthusiast –John Wesley and the Rise of Methodism-* (Abingdon Press, 1993).

<sup>43</sup> 日誌 1738.5.24.

<sup>44</sup> ウィリアムズは、ウエスレーが経験を強調したのは、英国教会の形式主義への反発であったとしている。また経験は権威を適切にするものであるとしている。  
Williams op.cit., p.33.

### III. 職制の問題

職制の問題はウェスレーの英国教会からの離反の問題と絡み重要な問題である。ウェスレーは職制を通常のもの(ordinary)と特別なもの(extroardinary)に分け、むしろ特別な職務に優位を与えていたことを考えていた<sup>45</sup>。聖霊によって与えられた職務が、一般の職務よりも優先権を持っているというのである。では何がより優先するのか。それは福音宣教という名目である。ウェスレー自身の言葉を聞こう。

私は自分を弁護する。私は若い時から、今でもそうであるが、英国教会の一員であり教職者であるし、あり続けてきた。そして私は自分の魂が肉体から離れるまで英国教会から分離するつもりはないし、計画もない。しかし、神が私に行うように要求されることを怠らないで実践することにより、そこにとどまることを許されないなら、すぐにでもそこから分離することが私の義務に適合し正しい。

(途中省略) 詳細に言うと、私は神が自分に福音を広めることを委託されたと信じている。そう、私自身の救いはそれを宣教することに依存している。(途中省略) それ故に、私は、福音宣教を怠ることなく、福音を語り続けて教会にとどまることができなかつたならば、教会から分離するべきである。そうでなければ自分の魂を失うことになる<sup>46</sup>。

ここにはメソジストソサエティーを弁護しながら、生涯英国教会の中にとどまり続けたいと欲したウェスレーの姿がある。しかしウェスレーにはより大きな神からの命令が聖書的な概念として存在していた。それは福音宣教と

---

<sup>45</sup> この見解は、藤本 満、「教職制—歴史的考察と諸問題—」、『宣教研究員会論集1 職制と按手礼』(1999)、イムマヌエル総合伝道団宣教委員会、参照。

また、林 牧人、「日本メソジスト教会における監督制の背景—メソジズムにおける episkope の実践—」、『ウェスレー・メソジスト研究』2 (2001)、参照。

<sup>46</sup> 説教 75 「On Schism」二・17。

いう大命令なのであり、この原則を守るためには英国教会の一員としての誇りも下位に置かれるのである。ウェスレーにとっては、福音を宣教することが教会の秩序を決定し、宣教することと礼典を司式することには区別がなされていたともいえよう<sup>47</sup>。

### III-1. 初期の職制理解

まず初期のウェスレーの見解であるが、ウェスレーにこの問題を目覚めさせたものはモラヴィア派との出会いであった。ウェスレーは、問題が起こるごとにモラヴィア兄弟団の様子を学んだり、また大主教ポッターの教会政治に関する本を読んだりしている<sup>48</sup>。原則的には高教会主義を保っていたウェスレーであるが、彼の生涯の中で度々違った立場を許容する発言をしていることも事実である。

私は神がどこにでも存在することを信じる。私は儀式や儀礼を愛する。しかし、私たちの偉大な神はそれらがなくても働くことができる方である。どのような方法でも、どこにおいてでも罪人が誤った道から元に戻るならば、私はその時喜び、あなたも喜ぶであろう<sup>49</sup>。

ウェスレーにとっては伝統というものよりも人々の救いが優先するのである。バンドという組織を自分のソサエティーに導入する時も、「信徒の監督」を採用できるのかという問題があった。ウェスレーは執事等がない場合、一時的な形でのみ信徒の監督を認めている。ベーカーの言葉を借りて言えば、「ウェスレーは監督の手によって与えられる与えられる召命と聖霊による召命の両方を信じていた」<sup>50</sup>のである。

<sup>47</sup> John Turner, *John Wesley*, p.105.

<sup>48</sup> *Journal* 270, 280, 282

<sup>49</sup> *Proceedings of Wesleyan Historical Society*, XXXIII. 101. 1739.20.27.

<sup>50</sup> Baker, *op.cit.*, p.64. 特にベーカーはウェスレーがフッカーに依拠していたことを論証する。フッカーの会衆政治の否定や継承された主教制への保持をあげている。

### III-2. 中期の職制理解

ウェスレーに決定的な影響を与えた本がある。1746年にウェスレーはキングの『原始教会について』の本を読む。この本は新約聖書の監督 (bishop) は管区ではなく教区の首長であり、長老達は監督とは度合が違うものであるが、秩序は同じであるという内容であった。監督、長老は主教に従属しているが同じ権力を持つという内容の本であった。ウェスレーがこの事をしばらく承認できなかった。もしこの本が正しいのであれば、主教と司祭 (長老) は1つの秩序にあるのであり、司祭も主教と同じように按手礼を施して良いということになる。深町は、「1746年にピーター・キングの『初代教会の根拠』を読むことによって、主教 (監督) と司祭 (長老) とは、御言葉に仕える権威は同じであるが、御言葉への奉仕の仕方が相違するのだと考えた。したがって司祭が司祭を任命することもあり得る」<sup>51</sup>とし、英国教会のロンドンの主教が按手礼を拒否した時にウェスレー自身の手で按手礼をなし、教区長として任命したとする。ウェスレーは次第に穏健的な職制理解に変化している。

### III-3. 後期の職制理解

後期のウェスレーの職制理解は女性教職の起用においても現れる。1780年にウェスレーは女性が説教をすることに躊躇を感じているが、メアリー・ボサンケット(1739-1835)が、多くの回心者をだしたことを受けて特別な神の摂理を感じざるを得なかった<sup>52</sup>。1784年はメソジストソサエティーにとっては一番重要な年になった。この年にメソジストソサエティーの憲法が制定されたのである。これはウェスレーの死後、ソサエティー維持の為であった。さらにウェスレーはアメリカのメソジスト教会の為にトーマス・コークやそ

---

<sup>51</sup> 深町正信、『ウェスレーの信仰とメソジスト教会』、更新伝道会、ウェスレー研究会パンフレット、No.9, 27-28頁。彼は続けて、機能において、司祭を監督するものが主教であり、Superintendentであると考えた。しかし、ウェスレーは彼自身が按手した者がアメリカで自ら司教と称しているのを聞いて、非常に不快感を示したことを紹介する。

<sup>52</sup> 彼女は1761-2年のロンドンでのリヴァイヴァルにサラ・クロスビー、サラ・ライアンと共に関わっていた。John Turner, op.cit., p.128.



の他の人に按手を授け派遣する。

1785年8月にウエスレーはチャールズにあてて「私は自分が英国とヨーロッパのどのような人にとっても霊的なepiskoposであると固く信じる。というのも、連続した継承は誰も証明していないし、また証明できない寓話であるに違いないということを知っているからである」と語っている<sup>53</sup>。この発言は後期のウエスレーのものであるが、かなり明確に主教制度そのものを否定している。職制理解が地位や権威の視点からのみ捉えられているのではなく、聖霊の賜物として捉えられていたのである。

## 結語

ウエスレーにとってソジストであることの一番の使命は宣教、証し、成長だった。ウエスレーは英国教会の三支柱を継承しつつ、理性と経験を包括的に捉え、聖霊の確証の教理を導入した。権威を経験と結びつけたことによりウエスレーの伝統はフリーチャーチの伝統へとシフトした。ウエスレーは職制理解においても権威的な職制理解よりも実践に則した機能的な職制理解を持っていた。思想面と職制面の実践性は共に並行して為されたと考えてもいいのではないだろうか。

ウエスレーの牧会においては、祭司制度に入れられた教職中心の教会形成だけでなく、信徒と共同の牧会概念があった。林は、メソジズムにおいては、ウエスレーの個人的な監督権が年会において集合的に共有されるepiskopeの形態であったことであったとしている<sup>54</sup>。筆者もこの指摘に賛成である。特に女性の登用は自由の象徴でもあった。ウエスレーはこれまでは教会においては重視されてこなかった女性への役割を重視した。教職主導の教会形成から、信徒と教職が共同した形での教会形成である。

ウエスレーは賜物を中心とした職制理解を持っていたのである。ウエスレーは権威的な職制理解よりも、実践に即した機能的な職制理解を持っていた。

<sup>53</sup> 手紙、To Charles Wesley, 1780.6, 1785.8.19.

<sup>54</sup> 林 牧人、「日本メソヂスト教会における監督制の背景—メソジズムにおけるepiskopeの実践—」、『ウエスレー・メソジスト研究』2（2001）、86頁。

神から与えられた聖霊の賜物が既存の職制になかった人々を用いることを可能にしたのである。

ウェスレーの運動は当時の教会観を凌駕していた運動であった。それには一つの目的があった。一人でも多くの貧しい人々に有効に福音を伝えたいという思いが最終的には勝ったのである。しかし、ウェスレーの真の貢献は、彼が宣教の情熱を欠いた形式主義を拒否すると同時に、教会の秩序を欠いた単なる熱情主義をも拒否したことにある。それを4支柱によって示し、信仰の実存と生活の真の一致を目指したのである。ウェスレーは英国教会に生まれ、土台として生きてきた。しかし彼の現実主義的な生き方、心の宗教は彼をして実存的なものに押し込めることはなかった。彼の周りには多くのメソジストと呼ばれる人々がおり、ウェスレーと共にソサエティを形成していたのである。メソジスト神学は野外説教のケリュグマと社会のオイクメネの中に作り上げられ、メソジストの弟子としての訓練がその正当性を高らかに鳴りわたらしているのである<sup>55</sup>。その意味で現代世界に生きる教会が学ぶべきことは大きい。

(日本ナザレン教団小岩教会牧師)

---

<sup>55</sup> David Lawes Watson, in *Aldersgate Reconsidered*, edited by Randy L. Maddox, (Abingdon Press, 1990), p.36.